

もう一つの世紀末ウィーン ～多「民族」社会における人々の暮らし～

東京外国語大学世界言語社会教育センター特任助教 古川高子先生にご講演いただきました。ウィーンといえば華やかな芸術の都のイメージがありますが、今回は「もう一つ」のウィーン、つまり「普通の人々」、とくに下町の労働者や職人の暮らしがテーマです。



タイトルにもあるように、ウィーンは多「民族」社会でした。ここでいう「民族」とは「何語話者であるか」を指しました。大多数はドイツ語話者でしたが、チェコ人などスラヴ語話者も住んでおり、現在ではそこにトルコ系・アフリカ系移民が加わっています。



▲トルコ系住民による簡易食堂

当時のウィーン市は21区までの行政区に分かれており、各区に階層別に暮らしていたのが特徴です。宮廷や官庁のあった市内区を中心に貴族や大ブルジョワジーが、その周りの市外区に中小ブルジョワジーや商工業者、労働者はさらに外側の郊外区に暮らしていました。府中市の友好都市ヘルナールス（17区）は、北部は山林に接した農村地帯、南部には中小ブルジョワジーの町がありました。



▲1927-28年に建てられた労働者向け団地（20区）

ウィーン郊外での労働者の暮らしは世紀末に大きく変化しました。産業革命による資本主義の発展により手工業者は大きな打撃を受け、衣服や靴の職人の多くは大規模工場の下請けとならざるを得ませんでした。またチェコ人をはじめ多くの移民労働者が流入し、郊外の人口は増加、住宅事情や衛生状態は酷いものだったそうです。

中心部の「世紀末文化」と郊外の「労働者文化」との間には大きな差があったようですが、当時は労働者が支持する社会民主党が力をつけ、民族を問わず労働者の生活の向上を目指すなど、多くの労働者が力を合わせ、たくましく暮らしていたことが伺えました。

参加者からは「ウィーンの今まで知らなかった面を見られた」、「普通の人々の暮らしを知ってウィーンを身近に感じた」などご感想をいただきました。

中央図書館4階にはオーストリアやウィーンに関する資料を集めた「ウィーンコーナー」があります。「関連する本のリスト」には、古川先生におすすめていただいた本などを掲載しましたので、ぜひ手に取ってみてください。



▲セルビア正教会（16区）